

巻頭言

『フォーラム人文学』第16号をお届けします。

2018年は、転換期を象徴する年でした。震災や酷暑、暴風雨は、以前であれば「何年、何十年に一度」と言われていたものが、これからは決してそうではない。本当に毎年、いつでも私たちの生活におそいかかってくるであろうという実感を深めさせるものでした。罹災者に対して思いをいたし、被害の記憶をとどめおくことは、大学発の出版において大事なことですので、西洋中世の年代記的に巻頭に触れさせていただきます。

同じく、記憶の記録としての本誌について。大阪市立大学文学部・文学研究科教育促進支援機構は、文学研究科・文学部の全構成員によって支えられた組織として、独特の個性を保ちつつづけています。新入生のための履修の相談会や新歓キャンプにはじまり、研究活動への経済的な支援や、進路や就職の相談会、市大授業やオープンキャンパスそのほかの機会における学生企画を繰り出す支援機構ですが、すべてを学生の手作りでというスタンスが示すままに、その活動は、全学および対外的にも知られることが多くなってきました。ただそれはいわゆる生徒会的・自治会的な学生組織というよりは、もう少しシビアかつ充実したものであるように思います。

それぞれの企画遂行のために要請されるのは、大学における知的活動としての高い水準です。たとえば本誌も、昔から編集に一家言があるような人がルーティンで作り上げたものではなく、年ごとに入れ替わる文字通り初心者たちが、本格的な企画誌を目指し創意工夫をこらして完成させたものです。編集スタッフを募集し、企画会議を立ち上げ、人々と交渉し、記事を集め、レイアウトを工夫し、印刷会社に指示を出し、卒業式などで冊子配布して……といった段取りを、手抜きなく踏まないとなりません。

そこまでの仕事をこなしていけるのは、毎年蓄積されていくノウハウを受け継ぐことで水準が維持されているからです。これはまさに、知見を積みあげて後の世代に伝えてゆくという、大学における最も大事な機能の一つが果たされた証拠といえそうです。このフォーラム人文学を手にとった方々は、そのページに大学における良質な知的営為の一端が潜んでいることに、思いをはせていただければ幸いです。

文学部・文学研究科教育促進支援機構
2018年度 会長 草生久嗣
(西洋史学専修/世界史コース 教員)